

この部屋から、旅に出よう。

Vol.6

Platform

水たまりの季節

雨空に、傘を持たず出かけよう

station

- VRChat : 温室庭園Alma_Rose
- cluster : Rainy Dark City
- NeosVR: 葵の雨宿リ
- Real.W : 鎌倉・明月院

Platform → contents

Gravure: 紫陽花岬4
温室庭園Alma_Rose VRChat12
Rainy Dark City cluster18
葵の雨宿リ NeosVR24
鎌倉・明月院 Real.W30
あとがき36

第6号のテーマは「梅雨」。

雨というのは必要でありながらも、ぬれたり傘が必要だったりと面倒な天候です。

バーチャル世界では濡れても大丈夫ですが、春と夏の間を通り抜ける風や雨の温度を感じられないのは残念です。

本誌のエッセイを読んで、仮想の風が心に吹いてくれれば何よりです。

編集長

世界には、色々な町がある。
その町ひとつひとつに、駅がある。

どの町も駅もそれぞれ違っていて、
違った人たちがいて、
そこを訪れた僕たちが抱く思いも、
きっと違うのだろう。
……VRでも、Real Worldでも。

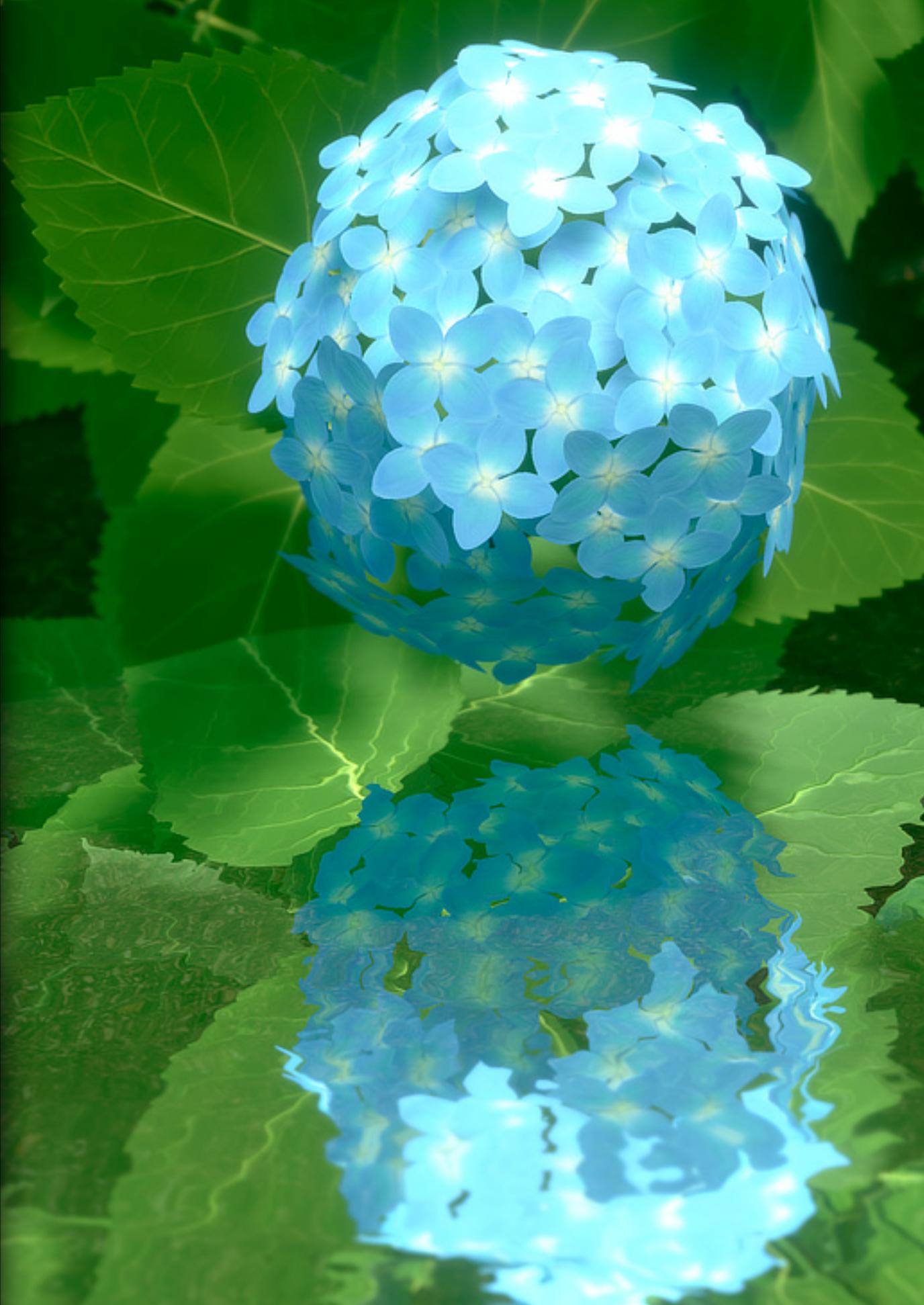
今はまだ離れ離れの「駅」を、「町」を、
あなたへ繋ぐ線路であります。

——それが「Platform」



外へ出かけよう。

雨が止んだら。





潮騒の向こう、また雨音が聞こえる。



World: 紫陽花岬 -Cape Hydrangea-

Created by East_1984



梅雨になると、幼い頃に鑑賞した子どもも向けアニメや童話を曖昧に思い出す。

ミッフィーとか、ノンタンとか、スヌーピーとか。好きなシーンと言えば、赤い長靴を履いて水たまりにドボン！と飛び込んだり、黄色いカッパを着て「わい！」と走ったり。もうずっと昔の話。断片的な記憶が混ざり合い、「あの場面

庭園に入って
みるケロ！



は、何のアニメで見たんだっけ？」と、鮮明に思い出そうにも霧がかかるて掴めない。

歳を取るにつれ、雨や曇り空を見上げると、憂鬱に感じるようになってしまつた。低気圧によって気分も落ち込む。自分で自分の食事を買いに行くのに、濡れるのが嫌で快適な自転車に乗らず、味気ないビニール傘をさして歩くのが億劫だ。

そんな私でも、ふとした瞬間に子ども心を思い出す時がある。ごくたまに、目のもなくサイクリングをしている最中の通り雨。傘もカッパもないから、当然全身ずぶ濡れになる。すると蘇る。服を着たまま田んぼに落ちた記憶や、服が汚れ

るのを恐れず泥遊びに夢中になっていた自分自身が。途端に通り雨も、プールの入退場時に浴びるシャワーのように、楽しく涼しいものに変貌する。良い大人にしてみれば、みっともない姿なのを忘れてしまつて。



写真／みくにき

Create by あーるまーる

ゆつたりとくつろぐ

雨宿りの楽園

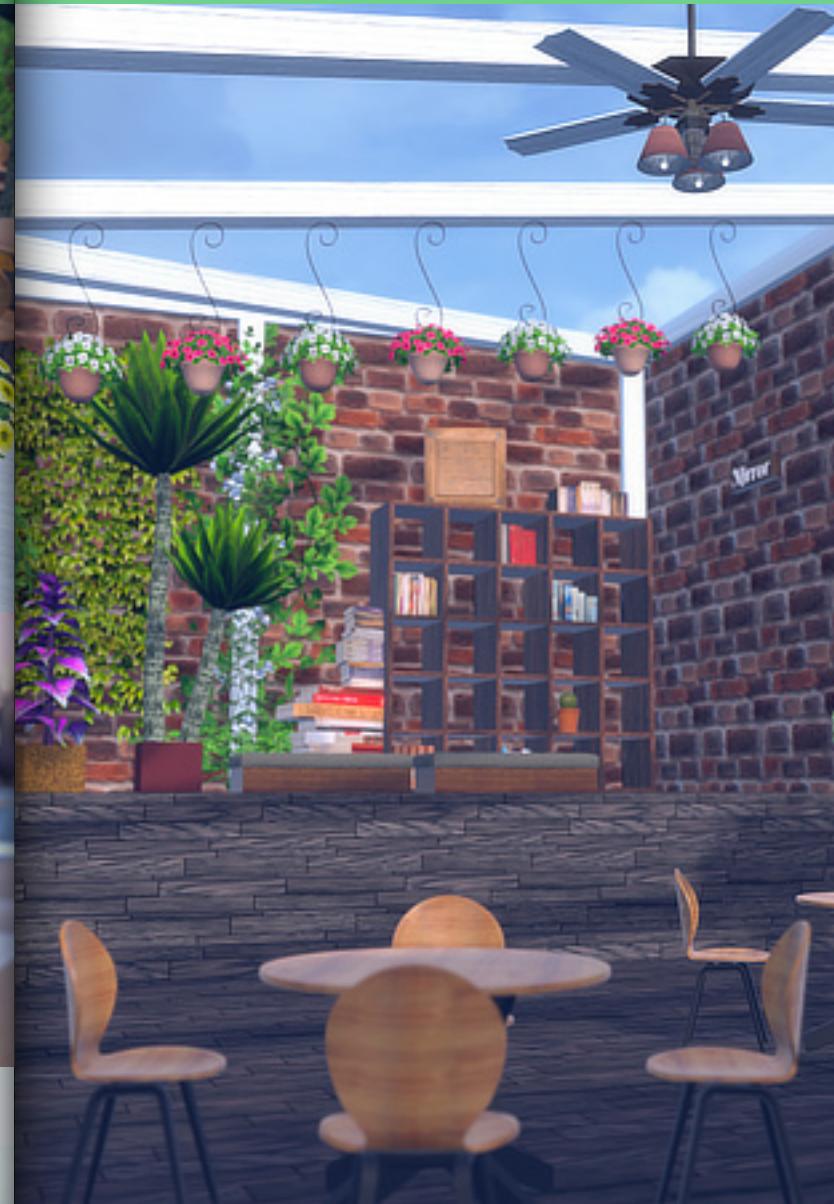
温室庭園の室内には、ゆっくりくつろげるスペースがあります。雨宿りやティータイムを楽しむ場所として格別です。



①壁に飾っている、庭園の様子や季節な花の写真。綺麗に写っている。 ②室内の中にはカラフルな花がいっぱい。花に囲まれたところで鑑賞を楽しめる。 ③棚に置かれているカエルのオブジェクト。梅雨らしい雰囲気を引き立つ。 ④カフェスペース。スイーツを食べながらティーパーティ。

入口から少し進み、棚に置かれたカエルのオブジェクトに近づく。彼は絶えず歌っていた。子どもから大人になるにつれ、人がカエルに対して持つ印象は、気持ち悪いか可愛いかの両極端に分かれる気がするが、私の場合は後者だ。『旅かえる』というスマホアプリで存分に癒された時期もあった。子ども心に因んでいえば、虫に対する感想も、「カッコいい・カワイイ」から「気持ち悪い」に変化する傾向にあると思う。このワールドにある歌うカエルが可愛い、なんて感想を抱けるところも、私が今でも憧れている童話の登場人物に

梅雨の季節に相応しい花々の数々。現実世界にて、降り注ぐ雨粒の中、仕事で忙しく行き来する際や、食料のため仕方なくコンビニに行く際も、花弁を優雅に濡らした紫陽花などを見れば、梅雨ならではの趣を見出しても、感触はこのワールドでも変わることはない。豊満でいて、慎ましく濡れた紫陽花の香りが、いまにも鼻孔をくすぐるかのようだ。



こうした思い出の数々もあって、『温室庭園Alma_Rose -After the Rain-』の光景は、私にとって心が洗われるような感触だった。

ワールドに入った直後に目にする、

その他で言えば、傘だろうか。とりわけ雑貨屋で働いていた当時のことだ。「当たり前じゃないか」とツッコまれたらそれまでだが、雨の日の方は傘が売れる。ただし、ここで買ったのにどうして忘れたの!??なんて大人の声が聞こえがちだが、親御さんはお子さんを心配して傘を買い与える。どうも普通のショッピングとは別の法則が働くらしい。それでいて、大人たちは夕食作りなどの為に「早く買ひなさい!」と急かすのに、子どもは「これが良い!」と一生懸命選ぶものだ。傘一つとっても楽しそうな子どもたちが微笑ましくて、つい私も良い傘を買ってしまった。雨に濡れると桜が浮かび上がる傘は、今でもファッショニ気合を入れるときは使っている。

りわけ雑貨屋で働いていた当時のことだ。「当たり前じゃないか」とツッコまれたらそれまでだが、雨の日の方は傘が売れる。ただし、ここで買ったのにどうして忘れたの!??なんて大人の声が聞こえがちだが、親御さんはお子さんを心配して傘を買い与える。どうも普通のショッピングとは別の法則が働くらしい。それでいて、大人たちは夕食作りなどの為に「早く買ひなさい!」と急かすのに、子どもは「これが良い!」と一生懸命選ぶものだ。傘一つとっても楽しそうな子どもたちが微笑まして、つい私も良い傘を買ってしまった。雨に濡れると桜が浮かび上がる傘は、今でもファッショニ気合を入れるときは使っている。





温室庭園 Alma Rose -After the Rain-

Created by
あーるまーる

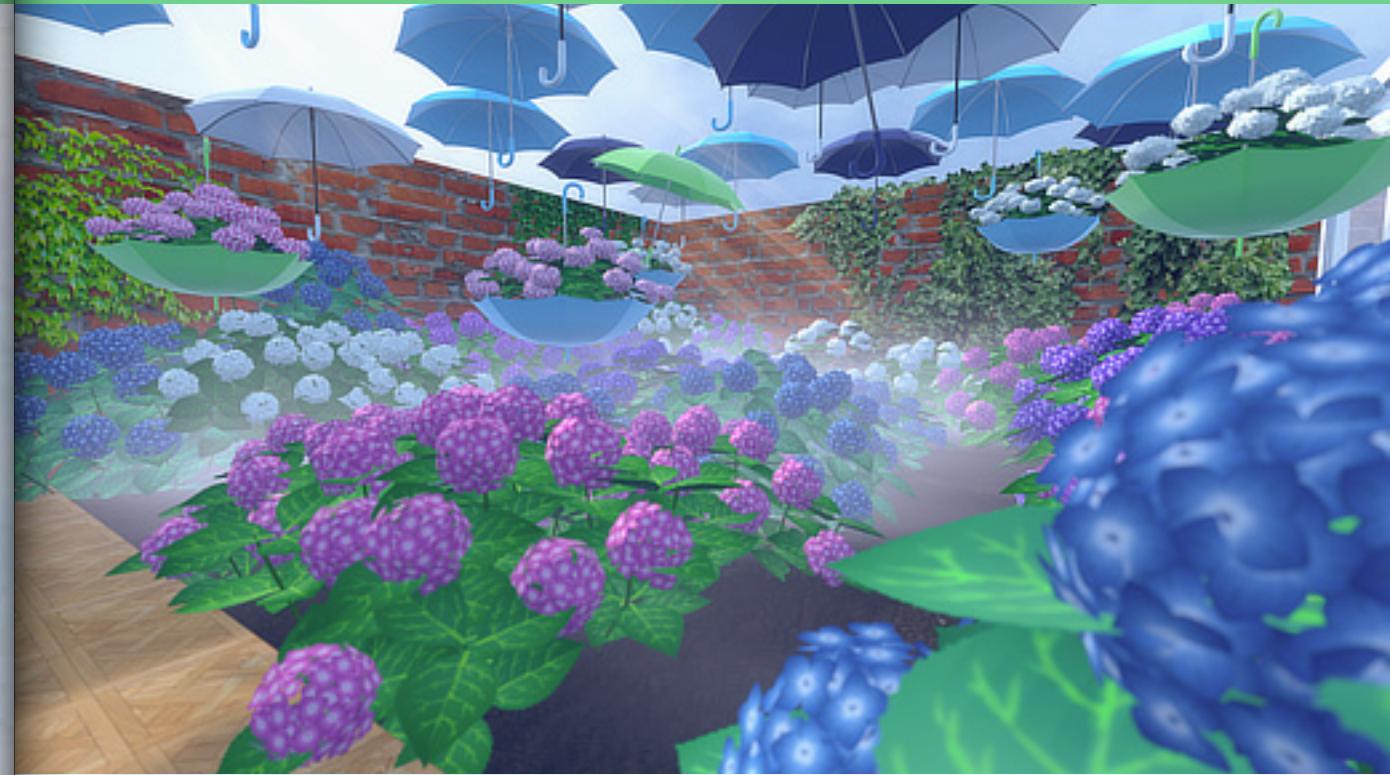
季節ごとに中庭が変わる、温室庭園のワールド。中庭にあじさいと空に浮かぶ傘が特徴。

ACCESS

(文..sun)

そうして、傘たちが浮遊している夢のような光景を見上げているうちに私は……あるいは、雨が降ることを願ってしまった。外聞を厭わず、体裁を捨てて、また子ども心に還って無邪気に笑いたくて。憧憬を象徴するように、思わず手を伸ばしながら日差しと見つめ合い、その時初めて気が付いた。壁に立てかけられた梯子があることを。

迷わず私は壁を登る。雨上がりの空は、どこまでも続いている。傘の上に飛び移ることだって、可能だった。



雨が楽しくなる 傘の庭園

温室庭園Alma Roseは季節ごとに中庭が違う。梅雨のシーズンに合わせ、空には傘、地上にはあじさいが見頃です。

室内から中庭に出る。ここが、このワールドの一番の魅力だ。梅雨というジメジメした季節を賑やかに彩るアイテム、すなわち傘。その傘たちが天井を形成するように浮遊しているのだ。そして傘たちの隙間からは、雨上がりを思わせる日差しが射し込んでいる。

なれたかのようで素敵だ。VRという異世界ならば、猶更のこと。

これは私の小説家としての哲学だが、小説の醍醐味とは箱庭のように、小さくも完璧な世界を創造できる点だと思う。曲がりなりにも小説家を名乗っている私が言ったらオシマイだが、動画やVRに比べて小説が表現できる世界は狭く、限りがある。だが裏を返せば、綺麗なモノだけを拾い集めても、違和感ある隙間を感じにくく、不要なモノを排除した理想の箱庭を想像する場合、小説は非常に相性が良い。綺麗なモノで埋め尽くされた世界の中で、私は悦に浸る。この温室庭園は、梅雨の綺麗なモノだけを拾い集めたようで、故に完成された世界なのだろう。とてもとても美しい。

部屋から外へ出よう。



写真／ヤマノケ

このワールドのスタート地点は薄暗い部屋。
やみに近い雨降る街が見えるこの風景は少し重く感じる。

良
い部屋だね、と皮肉混じりに独り言を零してみる。現実世界の私の部屋はこんなにも整然としたものではない。部屋に色を差す観葉植物の代わりに無造作に投げたゴミ袋が転がっているし、テーブルに小気味よく腰かけているポットの代わりに煙草の空き箱が散乱している。ただ、この場所と現実世界との差異はその程度のもので、降り続く雨の音と、木で鼻を括ったような態度で椅子に腰かけている私と、その心情などは大して差はないように感じる。

どうにもこうにも、じっとりとした雨が引切無しに降るこの季節を私はいざ好きになれたことがない。一日中薄暗くて、蒸し暑くて、髪は直しても直してもまとまらないし、

湿度計を見るたびに気分はげんなりしていく。今年はこの季節が訪れてからというもの、ずっと背中に筋肉痛のような微かな痛みが貼り付いている。オフィスワークから来る疲れが原因なのか、自律神経の乱れから来るものなのかは医療従事者でもないのだからはてさて分からないが、この痛みは微睡みのように、憂鬱な気分と共に絶えず纏わりついてくる。まどろっこしい気分をなんとか振り払おうと深煎りしたコーヒーに手をかけようとして、ふと、これは現実世界なのか、仮想世界なのか、どちらの私がどちらのコーヒーに触れて、自嘲的な笑みが零れた。この季節を「卯の花腐し」と形容することもある。そうだが、卯の花のように可

卯の花腐し

卯はウツギのこと。その頃降り続く長雨のこと。梅雨は夏を迎えるための準備に入る季節である。

Co cluster
Rainy
Dark
City

Created by Linx

部屋から出た先は ビルに包まれた街

薄暗い部屋の窓から外の様子が気になる。

部屋から抜け出すと、そこは暗雲とビルに包まれた街だった。

暗闇に近い暗雲。人気のないビル群。この虚無感がワールドの雰囲気を引き立てる。



置いてけぼりになりそうな距離。奥まで歩くのは辛そうだ。

部屋の外は閉園後の遊園地のような人気のないビルの真ん中だった。重苦しい空の許、置いてきぼりにされたような気分になる。迷子のようにふらふらとあてもなく辺りを彷徨うものの、無機質なコンクリートに叩きつけられた雨音と、雲間から覗く僅かな陽の光を浴びたビルの肌が、私を追い立てているように感じて、少し、息苦しさを覚える。似ている。初めて一人、都会に足を運んだ幼い頃のあの心境と。人はある日を境に突然大人になるようなことはない。子どもと大人をグラデーションのように混交して徐々に、徐々に、大人になっていくのだろう。けれども今の私には、まだまだ幼い自分が膝小僧にしがみついているようには思えて、何とも居心地が悪い。踵を返し元居たマンションの辺りに戻ると、側にカラリと光るワープホールがあることに気が付いた。二つあり、一つはきっと先ほどの部屋へと戻るものだろう。もうひとつは——。行潦に集まる雨粒のように、私はワープホールに吸い込まれた。

部屋の外は閉園後の遊園地のような人気のないビルの真ん中だった。重苦しい空の許、置いてきぼりにされたような気分になる。迷子のようにふらふらとあてもなく辺りを彷徨うものの、無機質なコンクリートに叩きつけられた雨音と、雲間から覗く僅かな陽の光を浴びたビルの肌が、私を追い立てているように感じて、少し、息苦しさを覚える。似ている。初めて一人、都会に足を運んだ幼い頃のあの心境と。人はある日を境に突然大人になるようなことはない。子どもと大人をグラデーションのように混交して徐々に、徐々に、大人になっていくのだろう。けれども今の私には、まだまだ幼い自分が膝小僧にしがみついているようには思えて、何とも居心地が悪い。踵を返し元居たマンションの辺りに戻ると、側にカラリと光るワープホールがあることに気が付いた。二つあり、一つはきっと先ほどの部屋へと戻るものだろう。もうひとつは——。行潦に集まる雨粒のように、私はワープホールに吸い込まれた。

重たい腰をあげて部屋の外へ向かおうと歩み出す。この季節に、わざわざこんな現実と同義の場所へと嬉々として潜り込んでいる私も相当愚かなものだなと思う。仮想世界を現実世界と馬鹿みたいにリンクさせて、この漫然とした気持ちから抜け出す糸口を少しでも見出そうとでも考えているのかもしれないが、さあどうだろうか。ただただ現実世界に引っ張られて見出さうとでも考へているのかも知れない。

耳には未だ雨音が聞こえている。この季節が訪れるところで作物が育つことも知っているし、貯水池に人々が生きていこうと必要な水が溜まることも知っている。でも、じゃあ私のこの行き場の無い感情はこの雨のように誰が洗い流してくれるのだろうか。いや、私は大人だ、それも知っている。そんなものは自分で自分を納得させて、慰めて、振り払わなければならぬことも。



憐な花を咲かせるようなことはない私ですらその湿度にやられて腐り落ちてしまいそうだ。

ここから
突き進もう。
夏が見える。

ビルから降り立った地上。
雨雲とビル群を抜け出し、光が
さす雲へ、導かれるかのように
突き進み、夏の扉へと辿りつく。

Rainy Dark City Created by Linx

タイトルの通り、暗い雲に包まれた市街地のワールド。
ダウナーな気分に浸りたいあなたにおすすめ。

ACCESS

(文..ヤマノケ)

を抜けて、突き進む。いつしか無数の雨の筋は消えて陽炎のようないい空が見えている。往来の真ん中に立ち止まる。このほんの一滴の期待をつまみ上げていいのだろうかと、必死に大人びようとしている高校生のように不安を滲ませた顔をあげて、涙を振り払ったかのような空を私はしばらく見上げ続けた。

子ども染みでいるかもしれないし、他力本願が過ぎるかもしれない。でもきっともうすぐまた、雨があがり、夏が来る。

ビルの間を抜けて、街路樹の間

視界が横に広がる。ここはマンションの屋上のようだ。幾ばくの清々しさとともに得も言われぬ寂寥感を覚えて、足が浮つくかのように感じる。大きな、とても私の腰を据えていて、なんとも打ちひしがれるような思いでいっぱいになる。いつそこから飛び降りて……なんて。でも、それも知っている。ここは仮想世界だ。なんの衝撃もなく、共に持ち合わせた衝動も行き場を失い、先ほどの殺風景な広場にえなくふわりと下り立つことしかできないだろう。

仮想の中の現実性を前に枯れた笑みを浮かべて塞いでいる私の右頬に、少し、ほんの少し明度が差していることに気が付いた。右手の空、変圧器の彼方に白む仄かな陽の光。雨の向こう、僅かな光が見える。神の光背を見たかのように胸の奥底を弾かれた私は、進むために、ここから抜け出すために、屋上から飛び降りる。

ここへ
飛び込もう。
次に進む道へ。

目の前は雨雲がかかった空。
ビルの屋上から飛び降りて
ちっぽけな自分の殻を破り、
次のステージへと変える。

To the next PLATFORM.



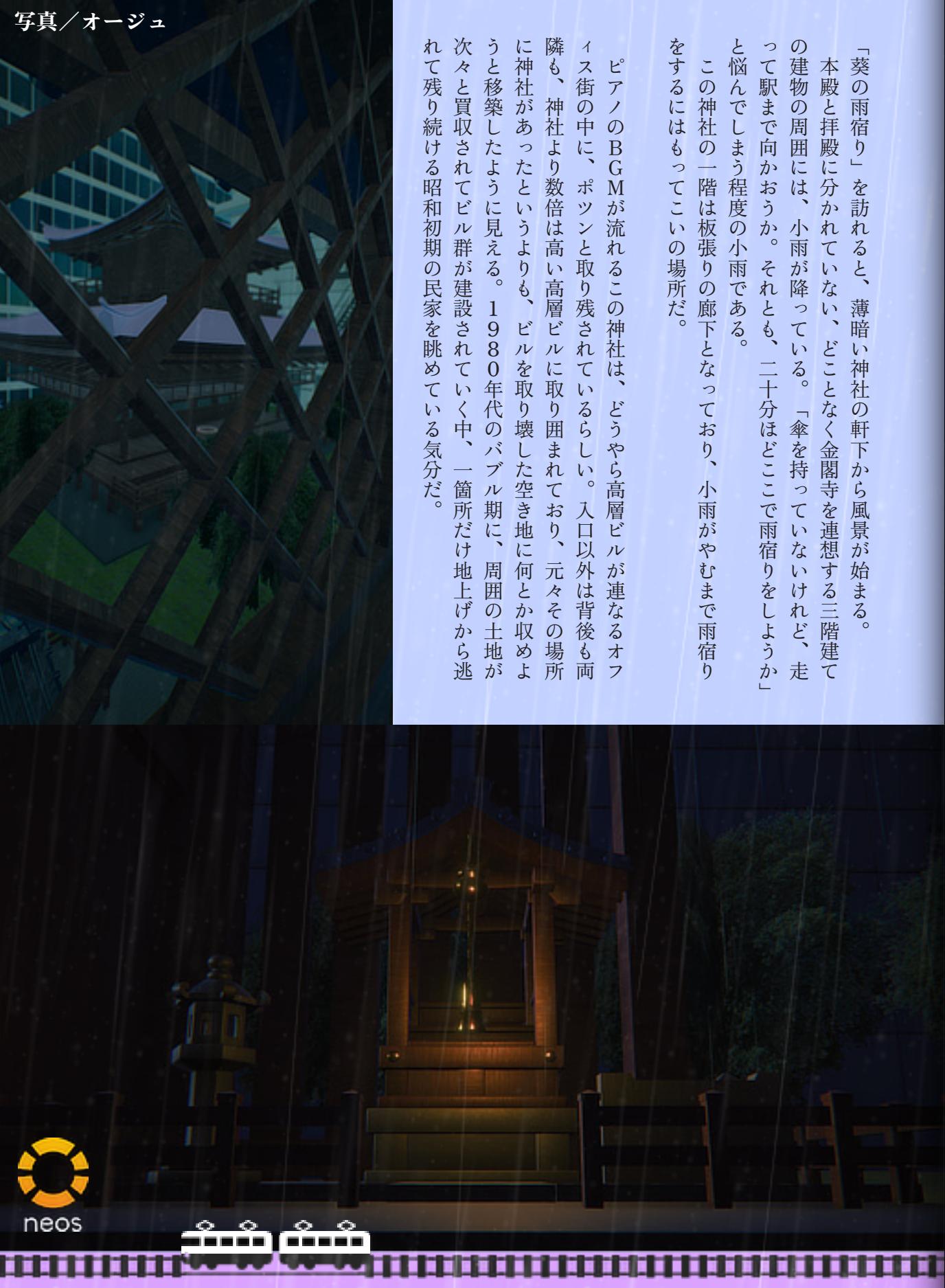
仮想の神社で雨宿り

文・わく

「葵の雨宿り」を訪れると、薄暗い神社の軒下から風景が始まる。本殿と拝殿に分かれていない、どことなく金閣寺を連想する三階建ての建物の周囲には、小雨が降っている。「傘を持っていないけれど、走って駅まで向かおうか。それとも、二十分ほどここで雨宿りをしようか」と悩んでしまう程度の小雨である。

この神社の一階は板張りの廊下となつており、小雨がやむまで雨宿りをするにはもつてこいの場所だ。

ピアノのBGMが流れるこの神社は、どうやら高層ビルが連なるオフィス街の中に、ポンと取り残されているらしい。入口以外は背後も両隣も、神社より数倍は高い高層ビルに取り囲まれており、元々その場所に神社があったというよりも、ビルを取り壊した空き地に何とか収めようと移築したよう見える。1980年代のバブル期に、周囲の土地が次々と買収されてビル群が建設されていく中、一箇所だけ地上げから逃れて残り続ける昭和初期の民家を眺めている気分だ。



さらに周りを見渡せば、境内の祠に参拝用の鈴がついていることに気づく。こ

こからかろうじて神社だとわかるものの、一見したところの構造だけでは、神社なのかお寺なのかさえ曖昧だ。本来の時代から取り残されたばかりか、参拝さえも求めていなかのように、神社は無言で座している。

高さ五メートルはありそうな入口の大門をくぐると、二車線の道路の傍に高層ビルが立ち並び、ガス燈を彷彿とするアーティレクな街灯が等間隔で設置されている。これらのビルは中に立ち入ることができる、あくまで背景として置かれたオブジェクトに過ぎない。

ここまで散策すると、このワールドにおける神社の役割が見えてくる。小雨が降っていても雨宿りすらできない高層ビル街の一角に座するこの神社は、参拝するためではなく、雨宿りをするための施設なのだ。

ところで、ワールド名にもある「雨宿り」の「宿り」とは、どのような言葉なのだろうか？学研全訳古語辞典によると、

新海誠監督の『天氣の子』の終盤のように、永続的に降り続ける特殊な状況を除けば、雨はしばらく待てば上がるものだ。雨宿りのための場所も同じく、雨がやむまで、一時的に場所を貸し与えてくれるためには、「宿り」も同じニュアンスを含んでいる。

鴨長明の『方丈記』の「又不知、仮の宿り、誰が為にか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる」の「仮の宿り」は、生死を繰り返して流転する仏教的な無常観の元で「今生きている世界も、仮の宿に過ぎない」と解釈したものだ。

雨宿りにおける「宿り」も同じニュアンスを含んでいる。

以下のような意味だ。

①旅先で泊まる場所。宿泊。宿泊所。
宿所。宿。

②住まい。住居。特に、仮の住居であることが多い。

③一時的にとどまること。また、その

場所。

れた。神社やお寺の軒下、駅の待合室や屋根付きのバス停、街角のコンビニや時には誰かの家の軒下。
そういう場所を借りて、私たちは雨がやむまで少しだけ待ち続けていた。

基底現実と仮想現実の雨宿りの根本的な違いは、雨宿り自体が目的なのか否かである。

梅雨の季節になると、毎日のように雨が降り、いつやむのかは誰にも分からぬい。会社やスーパーに向かう途中で小雨に見舞われて、（わずかながら入っても）不信がられなそうな）近くの建物の軒下で雨宿りをするかもしれない。ただ、雨宿りは現代の都市空間や時間感覚上は、おそらく場所を失いつつある。例えば近くにコンビニがあればすぐにビニール傘を買ってしまい、雨宿りをする間もなく自宅や会社などの目的地に向かってしまふだろう。

雨宿りは、別の目的を中断する一時的な行為であり、雨が止むか、傘を購入する目処が立つと終わってしまう。明日、明後日の天気予報が確実に当たるのかも分からないので、雨宿りをするために神

では、本当に仮想現実における雨宿りは、「宿り」……一時的にとどまることがだ。

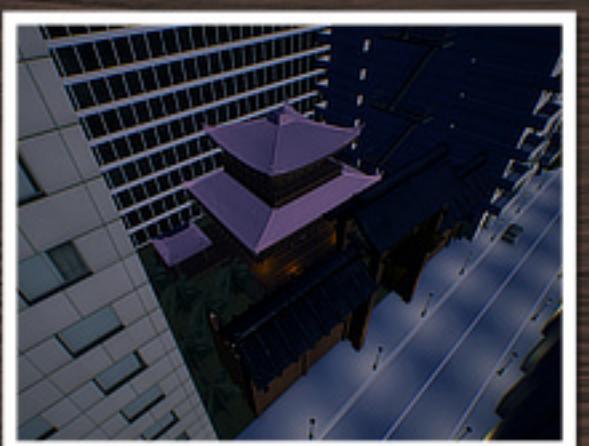


葵の雨宿り

Created by: 葵(aoi)



ACCESS in NeosVR



(文..わく)

仮想現実における「雨」は、仮想現実の外で降っているのだ。
心がささくれ立った時に、NeosVRにログインして「葵の雨宿り」へ訪れ、神社の軒下で「雨」がやむまで待つ。灰色の雨雲を眺めながら雨音に耳をすましていると、やがて雲間から暖かい陽光が降り注ぎ始める。

梅雨の季節に携帯傘を持ち歩き、雨宿りをする機会が失われた私たちにとって、このワールドは雨宿りを体験させてくれる貴重な場所である。



おそらくそうではないだろう。雨に濡れないよう、近くの神社の軒下を借りて雨宿りをする。そして雨がやむと、また元の場所へと帰っていく。

この雨宿りの一連の流れ 자체、基底現実で嫌なことがあった時に「葵の雨宿り」へ訪れて、雨音に耳を傾けながらぼーっとして、やがて気が済んだら……「雨」がやんたら、元の場所へ帰っていく流れと本質的に近い。





Real World

鎌倉・明月院

をうついたず
はにけうな
の色



写真／Tokikaze



せていた。ただその前で誰も
彼もが足を止めて代わる代わ
る写真を撮るもので、警備員
が往来を妨げないよう口煩く
注意している。そこに七百年
余りの歴史を持つ寺社の風格
や静謐さは欠片もなく、観光
地特有の上滑りした空気が充
満していた。

もつとも当の自分もまた彼
らと同じ穴の貉、紫陽花の勝
景を求めて来ているにはちが
いない。いささか憂鬱になり

私が明月院を訪れたのは梅
雨も盛りの六月某日、珍しく
傘の要らない土曜日のこと。
目当ては境内に咲く、梅雨時
の美しい紫陽花の花である。
渋滞に辟易しつつ、ようやく
車を停めて参道に入った私は、
しかし早速そこで打ちのめさ
れた。人、人、人。参道は引
きも切らぬ人の列でごった返
しており、その人いきれの中、
警備員が忙しなく行き来する。
早くも人酔いしつつ総門にた
どり着くと、明月院の名が刻
まれた石柱の向こうに、早速
紫陽花が鮮やかな青を垣間見

し、今なお數十もの歴史ある
寺院が建ち並ぶ仏閣の地であ
る。その中に明月院という寺
院がある。格式こそ著名な鎌
倉五山に及ぶべくもないが、
今日その名前は広く知られて
いる。あじさい寺、という愛
称とともに。

鎌

倉といえ巴、在りし日

の幕府の庇護に端を發

し、今なお數十もの歴史ある

寺院が建ち並ぶ仏閣の地であ

る。その中に明月院という寺

院がある。格式こそ著名な鎌

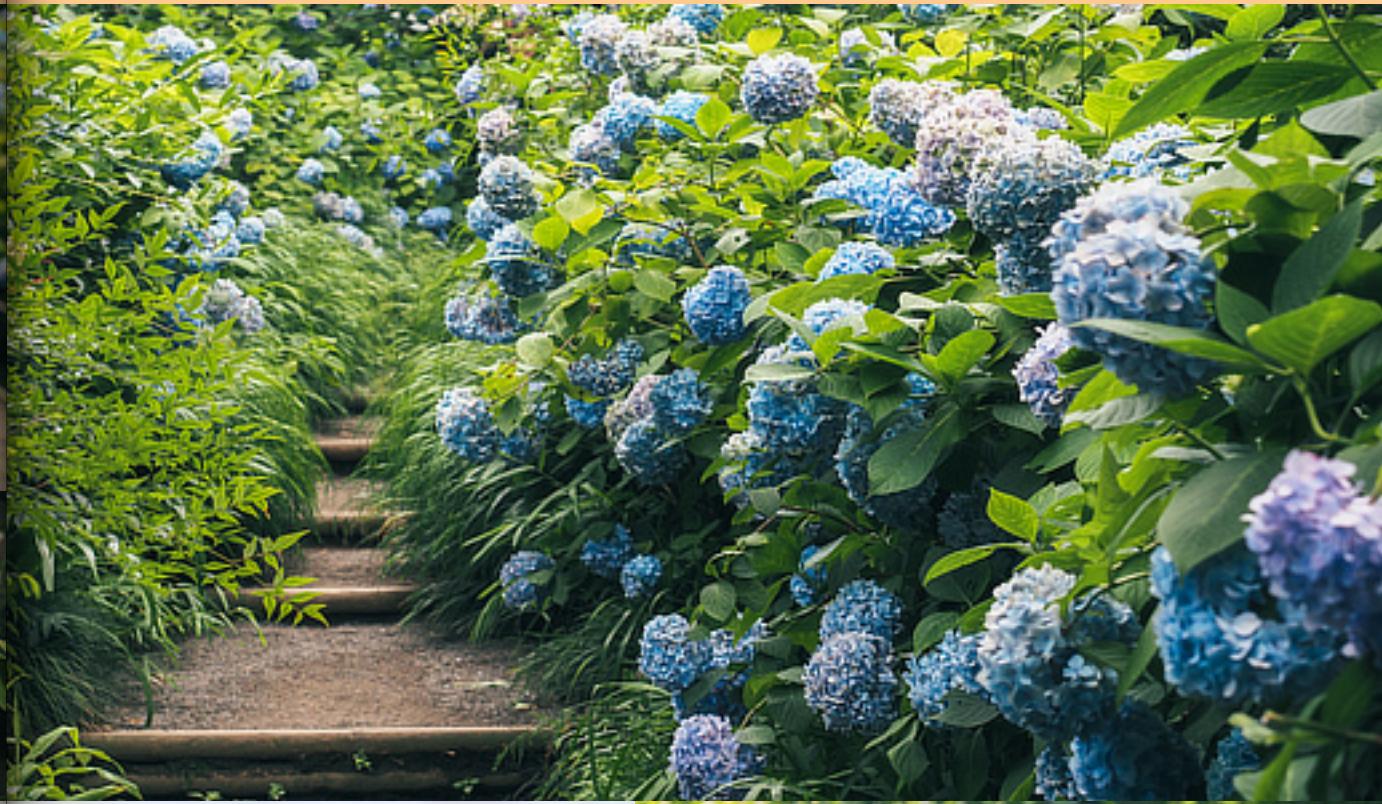
倉五山に及ぶべくもないが、

今日その名前は広く知られて

いる。あじさい寺、という愛

称とともに。





ながら境内に入ると、しかしそれを忘れさせるほどの見事な紫陽花の花々が出迎えてくれた。参道以外を全て埋めつくさんとばかりに咲く紫陽花は圧巻の一言に尽きる。観光客同士の押し合いへし合い、撮影場所の取り合いの面倒も、紫陽花に囲まれた小道の魅力にはかなわない。青、白、紫、紫陽花の彩り以外にも青々とした紅葉や様々な花が目を楽しませる。鎌倉ら

ながら急峻な地形を所々小川が流れる境内を、彼方此方に咲く紫陽花をかき分けるように登っていくと、本堂近くには紫陽花を抱えた花想い地蔵が佇んでいた。控えめに座す地蔵と、色鮮やかな紫陽花とのコントラストには思わずため息をつく。

ただ一方で、花想い地蔵を見て私の頭に浮かんだのは、そういう

ばここは寺なのだった、という思いだつた。言葉を選ばず言えば、これでは植物園の中に寺があるようである。聞けば、この紫陽花が植えられ始めたのもほんの七十年前で、そのきっかけも栽培の容易さから生垣代わりにしたことだという。いまやそれが観光資源としてこれだけの人を呼んでいるのだから、なんとも俗っぽい話だと思う。

いささか人ごみにも飽き、人気の少ない場所を探そうとして、ふと、生垣の向こうに紫陽花とともにひっそり立つ墓石を見つけた。その一角だけは別世界のような森閑とした空気が満ちており、ここが寺院であることを思い出させる。

ただそれでも、咲き誇る紫陽花の姿は美しく、それを眺める人々の顔には笑顔があふれている。そこで思わず自問した。その本分とやらは、それを固守することは本当に正しいのかと。思えば人も、この寺院も、そして仏教すらも、現し世に在る以上、等しく生き続

る。葬祭供養を近隣の寺に任せる檀家制度は、寺と人々との日常生活における繋がりである。この観光地化された境内の中で、墓石こそはその本分を留める数少ない部分のように見えた。



けねばならない。たとえそのために形を変え、本分すら忘れても、生きようとしてしまう。そう、生きるとは悩み、変わることである。ゆえに業を背負う。だからこそ、そんな私たちを尻目に姿形を変えず、迷うことなく淡々と生き、ただ子を残し綿々と続く植物に仏教は一つの理想を見出した。この紫陽花もそうだ。ましてや挿し木により増える紫陽花は、いわばクローンがあるので、その遺伝子すらも変わらずに生き続ける。「移り気」という花言葉とは裏腹なその不变性を思つた時、俗っぽさの象徴であつたはずの紫陽花の中に、私は不意に神聖さにも似た何かを感じた。この寺院や、あるいは仏教そのものすらも数百年の年月の前には変わらざるをえない。しかしほんの七十年前に偶さかにこの地に根付いた紫陽花だけは、その遙かな年月をも変わる少なく生きていくかもしない。

すると、不意にこの紫陽花に溢れた明月院自体がなにか示唆的なものにすら思えてきた。一方でこんな思いつき一つで物の見方ががらりと変わる我が身の軽々さに思わず苦笑いが浮かぶ。これでは移り気なのは私の方である。仕方ない。私

も、人の世も、続く限りは留まることなく変わり続けるしかない。悲しく、苦しむともそれが宿命だからだ。やはり紫陽花の様に不变ではいられない。

ただ救いがあるとすれば、変わらないものもこの世界にはあるということだろう。例えば毎年巡りくる梅雨の雨音と、この紫陽花の花々のように。それを確かに、また来年ここに来るのも悪くない。そんな思いを胸に、私は参道を下つていった。

(文・思惟かね)

花の色は うつりにけりな いたづらに わがみよにふる ながめせしまに

小野小町

Gravure : 紫陽花岬
-Cape Hydrangea-
撮影 : Tokikaze

station



VR CHAT 温室庭園Alma_Rose
-After the Rain-

執筆 : sun
撮影 : みくにき



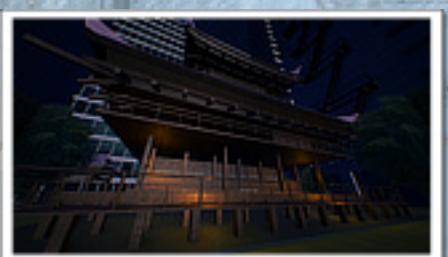
Rainy Dark City

執筆&撮影
: ヤマノケ



葵の雨宿り

執筆 : わく
撮影 : オージュ



鎌倉・明月院

執筆 : 思惟かね
撮影 : Tokikaze



感想などは
#Platform通信欄
へぜひお寄せください！



ニッソちゃん
編集長

SUN
ライター

わく
ライター/校正

オージュ
カメラマン

Nag
校正

Vol.6 Platform あとがき
思惟かね
編集/デザイン

みくにき
カメラマン

ヤマノケ
ライター

Tokikaze
カメラマン

燕谷古雅
編集/デザイン

STAFF | 编集長 | Editor Chief
ニッソちゃん

誌面デザイン | Graphic Design
思惟かね
燕谷古雅

執筆 | Writer
sun
ヤマノケ
わく
思惟かね
校正 | Proofreading
Nag

撮影 | Photographer
Tokikaze
みくにき
ヤマノケ
オージュ
わく(裏表紙)

Platform Vol.6 【水たまりの季節】

発行 : Platform編集部 (platformvirtualreal@gmail.com)

一版 (2023/7/1)

< To the next JOURNEY. >

2023. 7. 1

Our
Journey
Continues...



Platform

Vol. 6

水たまりの
季節